



## 1月のコラム ～人は人によってのみ救うことができる～

新年 あけましておめでとうございます。

この年末年始、例年なら会える人に会えなかった人も多かったことでしょう。盆、正月というのは、人間関係を築くうえでも大切な節目なのだと思います。

さて、私は、例年通り実家で巣ごもり読書。阪神淡路大震災で被災した18世帯26人の震災とその後の人生の証言を、神戸市のNPO法人「よろず相談室」代表、牧秀一さんがまとめた「希望を握りしめて」という本を読みました。年末の日経新聞「春秋」に取り上げてあり、なぜ25年経った今?としましたが、この証言集には、震災で障がい者になった人の話も多く出てきます。25年間ずっと、その状態と不安は今も続いているのだという事実を改めて認識しました。また、家を失った高齢者が、避難所から仮設住宅を経て遠く離れた郊外の復興公営住宅へ移り住むことで、近隣の人たちとのつながりやコミュニティから切り離されて25年… 時の経過と共に「孤独」は、増しているのです。当時、私がもし既にリタイヤしている年齢だったら、やはりこんな風に取り残されたかもしれないと、身にしてみます。今、この復興公営住宅は、高齢者ばかりになっています。

震災とは関係なく、高齢化が進んだある公営住宅で、学生の入居を認めたところ、住民たちが、学生を孫のように可愛がり、学生が参加することで自治会活動も盛んになり、交流が進んでいるという事例がありました。それを知った著者が、行政に投げかけたのですが、公営住宅法の「現に住宅に困窮する低額所得者に対するものである」「学生は、住宅に困窮しておらず低所得者でもない」との姿勢を崩すことはなかった。「『制度をとるのか、命をとるのか』と私は問う」と書いておられました。

年頭から重い話になりましたが、本のタイトルは、「希望を握りしめて」。生きるためには「希望」は、不可欠です。希望をもってたくましく生きている人の姿に勇気をもらう一方で、孤独の中で、希望はどうすれば生まれるのか。自分の中で多くの課題を抱えてしまいました。

このコロナ禍でもやはり経済的弱者、障がい者、病気や家庭の状況でハンデを抱えている人ほど受けるダメージは大きく、企業内でも、この変化に対応し、乗り越えていける人と落ちこぼれていく人がいます。本の中で「制度では人は救えない」「人は人によってのみ救うことができる」という言葉が印象的でした。しかし、制度をつくるのも変えるのも「人」。

なぜ今?と思ったのですが、25年経った今だからこそ未来に向けて、生の証言から学ぶことがたくさんあると思いました。

切り捨てるのか、手を差し伸べるのか、今、多くの場面で選択を迫られています。何が正解かはわからないけれど、人としての間違いだけは犯したくないと思います。

2021年1月 水田かほる

